金口木舌

2011年８月23日

金口木舌

１冊の冊子が届いた。表題は「真夏の朝　雲に乗って―故大城榮徳追悼集」。昨年８月に他界した元県失語症友の会会長の一周忌に、妻の貴代子さんが作った▼榮徳さんがくも膜下出血で倒れたのは１９９６年。貴代子さんが県生活福祉部長に就いた１週間後だった。病院のストレッチャーで運ばれながら「今まで言わなかったけど君は美人だよ」と発したのを最後に、言葉を失った▼それから14年間の闘病生活が始まる。貴代子さんは退職を願い出て介護に努めた。悩みや不安を抱える中、立ち上げた失語症友の会の仲間が「希望の光」となった。海外にも車いすで積極的に出掛けるおしどり夫婦の姿はたびたび報じられた▼追悼集には友人知人からの手紙80通と貴代子さんの手記が載る。「あなたのお陰で、人並みに介護人生を経験し障がい者の苦しみ、家族の絆など多くのことを学ばせてもらった」▼最愛の人を失った悲しみも記す。「介護の仕事を失業し（略）喪失感から抜け出すのに苦労しました」。同じ境遇の友と話し、関連の本を読んだが、一時期スランプにも陥った。遺族の心を支える場が必要だと痛切に感じている▼「二人三脚で過ごした46年間、幸せだった結婚生活が私の心の支えです」。ラブレターのような文章が読む者を幸せにしてくれる。遠い世界へ旅立った夫との〝遠距離恋愛〟は続いている。

(2011年8月23日付 1面)

☆３００字程度に要約しましょう。

☆１２文字以内で見出しを付けましょう。

年　　組　名前